

Master and Alternative Narratives among Hikikomori youth in the Japanese sociocultural context

人文社会科学専攻心理学プログラム
安居 元紀

問題

若者は所属する文化的価値観を参照し、時にはその価値観に抵抗しながらアイデンティティを形成する (Erikson, 1968)。これまで文化的価値観との相互作用によるアイデンティティ形成の研究は主に西洋文化に焦点を当ててきた (Arnett, 2015)。東洋諸国の一つである日本文化は集団主義を維持しつつも個人主義に変化している (Sugimura & Mizokami, 2012)。この変化の中、日本の若者は特定の文化的価値観を参照することが難しく、アイデンティティ形成に困難を抱えている。彼らがどのように困難を克服し、アイデンティティを形成するのか明確にする必要がある (Sugimura, 2020)。

本研究では、若者が文化的価値観との相互作用の中でアイデンティティを形成する方法を理解するため、マスターナラティブアプローチを用いた (McLean et al., 2016)。アイデンティティは人生を一貫した語りによりまとめることで形成される (Habermas & Bluck, 2000)。多くの若者は、文化の中で共有された良い生き方の期待であるマスターナラティブ (以下, MN) を無意識のうちに参照することで、文化的に受け入れられ、評価される自身の語りを形成する。しかし、様々な理由で MN から逸脱し、語りの形成に困難を抱える若者も存在する。MN から逸脱した若者は、自身の語りが文化的に受け入れられにくく、評価されないために主体的な語りの形成が制限され、逸脱した MN をより精緻に意識せざるを得なくなる。一方で、彼らは MN とは異なる生き方 (オルタナティブナラティブ; 以下, AN) を参照し、社会で再び居場所を見出す語りを形成する。

本研究では文化的背景の中での発達が精神病理学と密接に関係しているという主張 (Causadias, 2010) に沿って、日本の文化的期待から逸脱してしまい、語りの形成に困難を抱える典型的なサブグループであるひきこもり傾向の若者に着目した (Hihara et al., 2022)。ひきこもりは社会から撤退し、家にひきこもることを特徴とする精神病理である (20-49 歳の日本人の 1.2%; Koyama et al. 2010; Furlong, 2008)。ひきこもり症状を持つ若者は、日本における急速な社会文化的変化の中で、社会への移行に失敗することを避けるために家に引きこもり、社会とのつながりを最小限にすることが想定される (Suwa & Suzuki, 2013)。彼らは、集団主義と個人主義を反映する 2 つの相反する MN (他者の期

待に従うことと、主体性をもって他者から独立すること) のせいもあり、語りの形成に困難を抱えている可能性がある (Sugimura et al., 2021)。具体的には学校から社会への移行過程において、一方の MN を内面化している日本の若者は、もう一方の MN からの逸脱を経験し、自分の語りを文化的な期待に統合することが困難になる (例: 自分は音大に行ってミュージシャンになりたいが、両親は安定した職業に就かせたいので反対している) 可能性がある。このような若者にとって、社会的関係の維持と社会における自立の両方を放棄する AN は、MN に抵抗するための手段かもしれない。日本の文化的期待から逸脱したひきこもり傾向の若者に焦点を当てることで、日本の若者が語りを形成する過程でどのような MN から逸脱し、どのように MN と交渉しているのかを明確にすることができる。このように点に着目し、日本の社会文化的文脈におけるアイデンティティ形成の理解を広げることを意図した。

本研究の目的

本研究では、日本のひきこもり傾向の若者に着目し、彼らに変化する日本の文化的価値観との相互作用の中で、どのようにアイデンティティを形成していくのか、MN アプローチを用いて検討した。第一に、日本の若者が語りを形成する中で、MN から逸脱した後に、AN を参照する過程を確認する。その、ひきこもり傾向の若者は、健常な若者と比較して逸脱した MN を精緻化しやすい (仮説 1)、ひきこもり傾向の若者は、健常な若者と比較して MN から逸脱した後に、MN とは異なる AN を参照し、精緻化する (仮説 2) という仮説を量的分析で検討した。第二に、ひきこもり傾向の若者が逸脱した MN の内容を質的分析で検討した。

方法

参加者 18-27歳の若者96名 ($M_{age} = 21.55, SD = 2.25$, 女性60%) に25項目ひきこもり質問票 (Teo et al., 2018) を実施し、基準値 (42点) 以上の41名をひきこもり傾向群 ($M_{age} = 21.49, SD = 2.22$, 女性 58%), 基準値以下の55 名を健常群 ($M_{age} = 21.63, SD = 2.30$, 女性 63%) に分けた。

調査内容 両群に修正版 master narrative deviation interview (Hihara et al., 2020; McLean et al., 2017) を用いて半構造化面接を実施した。

評定項目 量的分析では語りを量的に評定した得点

を用いて分析した。評定項目はMNの精緻化(1-3点)、ANの精緻化(1-4点)の2項目で評定した。項目はMN, ANに関する評定マニュアル(Hihara et al., 2020; McLean et al., 2017)を参考に作成した。

結果

量的分析 一般群とひきこもり傾向群の2群のMN, ANを精緻化している程度を比較した結果、ひきこもり傾向群のMN, ANの精緻化得点は、一般群と比較して有意に高かった(Table 1)。仮説1, 2は支持された。

Table 1
ひきこもり・一般群別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

	一般群		ひきこもり群		t値	df	d
	M	SD	M	SD			
MNの精緻化(1-3)	2.07	0.47	2.56	1.06	4.59***	77	0.97
ANの精緻化(1-4)	2.02	1.06	2.71	1.23	2.88**	78	0.61

注) Mは得点の平均値, SDは標準偏差, dfは自由度, dは効果量

** $p < .01$, *** $p < .001$

質的分析 ひきこもり傾向の若者が逸脱したMNの内容についてテーマ分析(Braun & Clarke, 2006)を行った結果、2つのテーマが抽出された(Table 2)。

テーマ1 相互協調的自己観に基づく協調性 協調性とは、参加者が愛、友情、対話による広い社会集団との関係を通じて、対人的なつながりを表現することである(McAdams & McLean, 2013)。このテーマの背景には、集団主義的志向の構成要素として相互依存的自己観が浸透していることが考えられる。相互協調的自己観は日本文化において支配的な人間観であり、他者への配慮、他者との調和的な関係が規範として強調される(Markus & Kitayama, 1991; Triandis, 1995)。実際にひきこもり傾向の若者は語りの中で、相互協調的自己観が優勢な文化に特徴的な関係性である、多少嫌なことがあっても仲間と協調的な関係を維持すること、仲間との関係性の中で適切な行動をとること(Markus & Kitayama, 1991)を逸脱したMNとして挙げた(サブテーマ: 協調的な友人関係)。加えて、ひきこもり傾向の若者は自身の家族と対比しながら若者の相互依存的な自己観と関連がある、結束力が強く、家庭団欒の家庭像(Cheng et al., 2021)を逸脱したMNとして語った(サブテーマ: 調和的な家庭像)。

テーマ2 他者と同質なライフコースの選択 ひきこもり傾向の若者は、個人的な目標の達成よりも他者との同質性を重視する集団主義的志向(Triandis, 1995)

Table 2
ひきこもり傾向の若者が逸脱したMNの内容に関するテーマ分析の結果

テーマ	サブテーマ	語りの例
相互協調的自己観に基づく協調性	協調的な友人関係	小中高とそれぞれの環境で出会った人達と関わって、友好関係を広げて、人間関係がうまくいかないことがあっても修復しながら、学校の行事とかで友人と楽しくして卒業する。
	調和的な家族像	家庭団欒は経験してこなかったし、うちでは、母はご飯作らない。父が食べなかったり捨てたりするから、作らなくなった。ご飯はみんなで食べるのが普通だと思うし。あと休みの日に家族で出かけない。本当だったら旅行も全員で行くべきだろうなと思った。
他者と同質なライフコースの選択	直線的なライフコース	自分の周りだと大学まで行ってストレートで就職するのと、親戚は公務員が多いので、そういった安定的な仕事に就くのが、卒業後の一般的なコースと感じている。
	直線的なライフコースに対する親の強い期待	私は親が望んだものを歩んできた。高校も、姉と同じ所に行って、姉が歩んだレールの上を歩んできた。それが多分、親がこうあってほしいと思う姿だった。同じ様なストーリーを描いてほしいのかなとは思っていた。いわゆる進学校、国公立大学とかそういうものを。

を持っていた。彼らは他者と同質なライフコースの選択から逸脱しつつも、そのライフコースを選択しなければならないという不安を語った。他者と同質なライフコースの具体的な内容としては、大学まで進学し、失敗することなく大学から職業への円滑な移行をすること、そして安定した職業につくことが挙げられた(サブテーマ: 直線的なライフコース)。加えて、ひきこもり傾向の若者は、他者と同質なライフコースを進むことを親から強く期待されており、期待に応えるために、そのライフコースを進むことを意識せざるを得なくなっていた(サブテーマ: 直線的なライフコースに対する親の強い期待)。

考察

量的分析の結果から、ひきこもり傾向の若者が語りを形成する中で、健全な若者と比較しMNから逸脱しやすいく、その後ANを参照しやすいくを確認した。また、質的分析の結果からひきこもり傾向の若者が逸脱したMNとして「相互協調的自己観に基づく協調性」、「他者と同質なライフコースの選択」という2つのテーマが抽出された。これらのテーマは他者との協調や、同質性を求める点で集団主義的側面の強いMN(Triandis, 1995)と考えられる。一方で、個人主義的なMNは見られなかった。個人主義的な語りは、集団主義的なMNに抵抗するANとして参照されている可能性がある。

これらの結果から、ひきこもり傾向の若者は、集団主義から個人主義に変化する日本文化の中で、主に他者との協調性や、同質性を求める集団主義的なMNから逸脱し、そのMNと交渉する中でアイデンティティ形成に困難を抱えることが明らかになった。その後ANを参照することでアイデンティティを形成する可能性が示唆された。本研究の結果は、日本文化との相互作用による若者のアイデンティティ形成を調査することで、文化的文脈におけるアイデンティティ形成の全体像の理解に有用な知見を提示した。今後はひきこもり傾向の若者がアイデンティティ形成する際に、MNから逸脱した後に参照するANの内容を検討する。

(主任指導教員: 杉村和美)

副指導教員: 梅村比丘・児玉真樹子・上手由香)